

# 南島つれづれの記(その6)

## ～史上第四位の明和の大津波～

矢崎清貫（燃料部）

### 伊良部の海からの発想

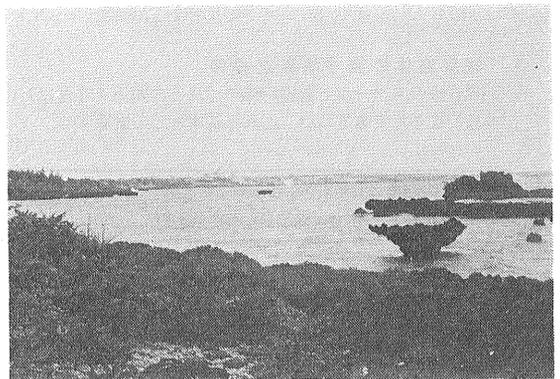
「窓をあければ港が見える」淡谷のり子のブルースではないが 筆者が長いこと滞在した宮古島での旅館がちょうどそのような位置にあった関係から 朝な夕なに伊良部の海を心置きなく眺めた。四季それぞれに移り変わる波紋の織りなす海の情景は しばしおだつみの潮騒があったり スコールのもたらす残涼が窓辺のカーテンを心地よくゆすってくれたり 雨にかすむ海峡にかかる七色のかげ橋が一直線にのびて 緑の多い伊良部の島に消えてゆくさまは まさに超越者がえがいた一枚の絵のような感情へとみちびかれる。しかし台風銀座といわれている平坦な島には 白波の織りなす練絹のうねりだけの期間だけではない 風速40～70mという自然の猛威のなかに立ちほだかわなければならないのである。とくに宮古の島には 台風にたち向かうだけの高い山脈もなければ防風林もない。ただ台風という偉大なエネルギーのなすがままだということになる。こうなると波静かな伊良部の海を眺めて幻想の境地などこふく風か 海はいきりたち波は轟音をたてて天に舞う 5分板の雨戸をはじめこみ暗闇みのなかでただ一すじに耐えることしかすべがないのである。

平良港へ舟で上陸する人々の多くは 港の背景にある白亜の洋式建設のビル群に驚き エキゾチックな感情にしたるのか 地中海のエーゲ海あたりの港を連想するという。このような風景も 一つには台風への対策の一環としてであって けっして作為的なものではない。

1969年の第6次天然ガス調査期間中に 初めて伊良部島へ渡たる。その当時は たかだか 8km へだった伊良部島や下地島に渡るのに 天候のいかんによっては日程の変更のありうることを聞かされ驚いたことがある。しかし 長年離島への調査旅行を続けるはめになって始めて その内容が理解できるようになった。離島への旅は 額に青すじの入いたコンピューター人間の綿密な計画や日程など 始めから無いも同然で 天候のいかんによっては一瞬にして消え去ってしまう。いわゆる 山登の極地法で多く起こる沈澱という言葉に相当するもので ただ辛抱強く待つよりしかたがない。ともすると 現代という管理社会に組込まれた多くの人々は 還元哲学という発想のもとで 頑健な肉体と豊かな心を置きわすれつつある。この時の伊良部行きで はじめて沈澱という足止を体験する。それにしても天候と離島というからみあいは 何回となく沈澱してみても 始めて認識が出来るものであつて 机の上で旅費を計算する人にはわかつてもらえそうにもない。この日の朝平良港を出発する時は 多少風がある程度で簡単に天気はくずれそうもないように見えて 帰路の心配などだれ1人考えてもいなかった。しかし 伊良部島の調査もほぼ終つて帰路へという頃になって 天候は急変し台風なみの雨風に見舞われてしまい連絡船の欠航を知らされる。いわゆる離島での足止である。一行12名のうちの大部の人は 初体験であろうし 現地の人々（調査の助手・宮古地方庁職員）にしてみても家族との連絡もとれず参ってしまう。



第1図 宮古島から伊良部島を望む

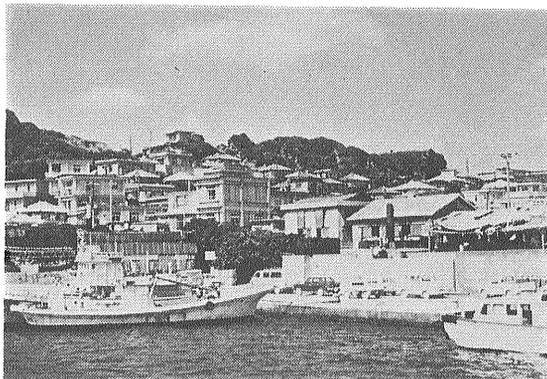


第2図 宮古島平良港と白亜のビル群

全身ズブぬれで 浜辺のわびしい旅館にたどりつき 天水の風呂と泡盛の強いアルコールに麻痺して かりねの一夜をすごす。翌日は 雨も止み晴天となるが風が強くて舟は欠航ということで なんとなく気がせいってくる。しかし この島から脱出は己れが足を信ずることも出来ない さりとて船頭は頭を下げてはくれそうもない。とにかくこの浜（佐良浜）からの帰航は 無理であるという情報が流れ 長山港（伊良部島南岸）から パイナガス海岸へのもっとも近い海峡を渡ることにする。しかし連絡船は ないことから舟一艘（漁船）をチャーターしなくてはならないし 船頭をなっとくさせることが必要である。このことで地方庁の与儀さんは 大変な工作をしていたそうであるが 時間の経過のお陰でやっと日の明るうちに 長山港を出ることが出来た。舟が欠航しているだけあって 風が強くと全員が覚悟はしていたものの海峡の真中では顔面蒼白となり気分が悪くなる人もいて やつとの思いで大きな陸地へ上陸でき現在を意識する。離島という言葉のもつ意味は ただ言語だけのものではないし あまい感情や ロマンチックの概念もない。そこでの底流にある本質は考えもおよばない隔離された次元が主体であって 自分が体験して初めてその実態をつかめるものであろう。同行した与儀さん（現在宮古地方事務所の職員）の話によると 多良間島へ出張した同僚が約60日間足止めをされたという記録があることを話してくれた。このようなケースが はたして7～8年前の本土の行政のなかで 許されたであろうか しかし このような話は伊豆七島に住む人々にもよくある話であるといわれていることから 離島という場合は 新幹線がどこからどこまで走ろうと ジェット機が東京とニューヨークを飛んでいても何んら関係がないのである。依然として100年1日で 離島苦という現実には自然の偉大さを追いぬくことはありえないであろう。当時は 船自体も小さく「オンボロエンジン」では風の強い伊良部の海峡を渡るのに多くの苦労があったであ

うし 沈澱の覚悟が要求されたであろうが 最近では船も大形となり 多少の風でも船が欠航することはない。筆者も今回の伊良部島調査は この連絡船を利用して何にかと好都合であった。舟も以前の舟とは 思いもよらない新造船で エンジンも焼玉からディーゼルに替わり従来は1時間もかかったものが20分内外で 佐良浜港に着いてしまう まさに都会での通勤電車並になっている。このお陰で宮古島を訪ずれる多くの若者は 伊良部島へ渡ることが一つの旅行の計画に含まれていて 計画通りの観光を楽しんでいるようである。しかし その反面都会人が求める幻想的な自然は旅行者の増加に相関して現代という環境のなかに還元されつつある。

最初に伊良部島を訪ずれた当時は 下地島にジェットパイロットの訓練飛行場建設をめぐる賛成派と反対派の対立が激しく 殺害事件も起きていたほど島全体が揺れうごいていた。このようなこともあって 第6次の天然ガス調査活動には地元役場の職員に案内していただき なるべく地元民への刺激をさけてポイントだけの調査に限った。その当時は 島にはハイヤーは一台もなく 三輪車をチャーターしての調査であった。当時の島の平坦面は濃い緑のジュタンを敷きつめたような「サトキビ」畑によって被われ素朴な自然と 純な田園風景が目にとやきついている。しかし最近では 飛行場の建設とあいまって いたる処に現代を代表する採石場のはげ山が形成されていることが 海峡をへだてた平良市から確認できる。10年も20年も後進的だといわれている離島に 超近代的な航空科学を導入するということは 時計の針を手で廻すようなことで 受入れ側の地元民にも それをささえる母なる自然も大いにとまどったことがうなずける。下地島は 長さほぼ4km 幅2kmの小島であってそこへ羽田空港とほぼ同じ長さの滑走路を建設するという事は 当然いくつかの弊害もでてくる。とくに伊良部島と下地島に抱きこまれている北部の内湾



第3図 伊良部島の舟着場である佐良浜部落



第4図 伊良部島と下地島に抱かれる礁湖のなかの小島

は 大小さまざまな形の変った小島が30以上もあって 一見松島のような景観で知られている。 とくにこの内湾は 下地島北西海岸より 伊良部島白鳥崎につながる 宮古群島でもっとも大きな礁縁が発達して ラグーンの水の色は南西諸島でもっとも美しい場所ではないかと思われるほどみごとである。 こともあろうに この美しい干瀬の一部を埋立て 滑走路を延長している。 この埋立に必要とす石材を 伊良部島や下地島から切り出しその結果が禿山をつくり 防風林を根こそぎ破壊している。 建設には 破壊はつきものであるという還元主義を超えて 人間としての価値ある開発を望みたいものである。 しかしこのようなたわごととは 飽和文化に住む都会人の主観であって 「シマ・チャビ」から現代という発想ではけっしてなく 都会という雑踏のなかに住む人種の たわごとのように思えたりする。 水納島の宮国さんの話ではないが 離島苦という苦しみはそこに住んでみて 始めてわかることであって 第三者がとやかく意見をのべられるものではない。 そこに住む住民がきめるべきであろう。

この伊良部の海（海峡）は「宮古本島周辺の人の住んでいる離島でもっとも遠くかつ波の荒れ狂う海峡である。 このことが 昔から伝わる海獣伝説として残っている。 それによると 「宮古島と伊良部島の海峡には無類の大鮫が現われて航行中の船をおそい人畜を捕え食い 船諸共に呑み尽すので往来商売の途も絶え 近海を漁猟する船も恐れて出られず 島民困窮したがいかんとも出来ず ときの伊良部島の主豊見親氏親という人がただ一人小刀を持って大鮫の腹中に入りこれをしとめる。 しかし本人も息絶えて比屋地に葬られ 神として祭るようになる。 このことがあってから この海峡の往還の道開け 漁猟も安んじてできるようになり 島民安堵することが出来たという」（宮古庶民史より）。

この記録では 大鮫ということになっているが余り宮

古周辺で鯖がみかけないこと 伝説としての海獣としては鮫のほうが迫力がありそうであるので 筆者の作為で鮫とした この点了解していただきたい。

鮫の話が出た処で 南の海 特に礁湖のなかには鮫がまぎれこんで来ることがある。 平良市の海水浴場はちょうど伊良部の海に面した海岸で そこではよく鮫をみうけるとのことであって この海峡には伝説だけの鮫ではなく 鮫の生息の実態もあるのである。

下地島には 津波にまつわる人魚の怪奇ないつたえがある。 それによると「下地島には一つの部落があって その部落の一人の漁夫が鯛に出て「よなたま」という魚を釣った この魚は人面漁体でよく物を言う魚であるといはれているので 漁夫は珍しがって明日隣の人々をも集めて共に賞味しようと思ひ 炭を起し乾していたが その夜隣家の小児が深夜に起きだして泣き叫びだして止まらず 早く伊良部島に行こうと母を促してやまないので 母もしかたがなく子供を抱いて庭に出たけれどもいよいよ大声に泣き叫んで止まらないので 怪異の思いをしていると 遙か海の彼方から「よなたま よなたまどうして遅くまで帰らないか」という声が聞えた隣家の「よなたま」は これに答えて「吾はいま荒あみの上に乗せられてあぶり殺されようとしている。 早く「さい」（潮のこととなっているが 地震のことを「ない」と呼んでいることから 「さ」と「な」の発音のちがいもあるかも知れない）をやって救って下さい」という声がいかに恐ろしく身の毛もよだつ思いがしたので 母は子供を負うて伊良部島にかけつけたが この母と子供が伊良部に着くや着かない間に轟々たる物音と共に大津波が襲うて来て 下地島は人家諸共に牛馬も残こらず洗い尽され跡形もなくなった(第二宮古島旧記から) 記述のなかの( )は 筆者が付加えたものである。 このなかに出てくる「よなたま」は 人魚の一種で顔は嬰兒の顔で 鳴き声も嬰兒のものによくにているといわ



第5図 干瀬を埋めてのばした滑走路



第6図 羽田空港とほぼ同じ長さの滑走路

れている。この地方では海のことを「よな」というのだと古者がいっていることから海にでて漁獵に行くことを「よなうり」と呼んでいる。「たま」は人間の顔に似ているということから女性名称の通俗的な名前をもじって「たま」を結びつけたものであるといわれている。柳田国男はこの「よなたま」は海霊の意味があると別な角度からのべている。

下地島は伊良部島の西方にある面積わずか9.4平方メートルの島であって古くは狭い海峡がほぼ南方にのびていて伊良部島とは舟で行ききをしてきたようである。しかし最近では5箇所に橋が出来ていて陸つづぎのような錯覚におちいるが従来から干潮時には楽に徒歩で渡れたであろう。前述した伝説のなかでは部落があったことになっているが古くから人家はなかったようであるし耕地も南部に僅かあるだけで大部分は石灰岩の露出している原野である。島の標高はもっとも高処で15m内外であって大部分は10m以下である。この高さでは津波と関連する伝承があってもおかしくないし現に後でべる明和の大津波では多くの被害を出していることから人家や耕地にかかわる現状が理解される。筆者がこの紀行の「その1」でのべた「イクマ(Ikima)島は沈没したか」の地図を見ていただくとわかる。この地図は日本地質学の開祖(野外地質学者)であるライマンと15人の弟子(このうち3名はマネージャーであるから厳密には12人の弟子ということになる)の一人である賀田貞一(ペンシルベニア州の地質調査所員をへて帰国後実施した宮古八重山地質見取図)が示した地図であるがこれによるとその当時の下地島は点線で記入されていて八重干瀬と同様な記号であることから暗礁的な感じをうけ現在のように下地島という固定化した概念はなかったように思える。しかし1771年の明和の大津波の記録によると下地島の被害が記されていることからみると現在よりも多少変った形の島は現

存していたことは確かである。このようなことから下地島にまつわる津波伝説はある意味で史実に近くこのことが現代まで人家をつくらない理由であって伝承が現実に残っているし今後も津波の被害をうける可能性があるということも長い年月のなかから考えられた生活の知恵ということになる。下地島は宮古群島のなかで水納島について標高が低くかつこの島がおかれている地理的な位置や地形的なことがらを考慮すると明和の大津波のような南方からの押波にはよほどの注意が必要である。

伊良部島と下地島を通じてよく知られている観光地の一つに下地島の「通り池」がある。この「通り池」は下地島の西北部の海岸近くにあつて直径100m内外もあろうかと思われる円形の池で周辺は直角に切り立った7~8mの岩壁(石灰岩)で水深は10m内外はあるのではないかと思われるほどよどんだ紺青の水(海水)を湛えていて見る人によっては肌身に寒さを感じさせる。この池に一度落ちたら這い登ることはどうして出来そうもない。このような同形の池が東西に二個並んでいる。この二つの池は池の底では水は相通じており現在の海とも通じている。この二つの池の成因については陥没説もあるようであるが周辺の切立った石灰岩の岩壁や池の底に石灰岩のないことなどから陥没ではなく隆起サンゴ礁の形成過程においてみられる潮道の残洲がその後の波浪や海流や風によって形成されたように考えている。現に下地島西海岸の多くには波浪によって形成されているいくつかの洞穴や通り池的な池がみられる。しかしこの池の形成はただ波浪だけではなく海面変化もかなり強い影響があるように思われて前でのべたような賀田の地図で示すような時期も何回となくあったような気がする。この通り池には継母伝説が広く伝えられている。それによると「継母が継子を亡き者にしようと思って我が子と二



第7図 近代化とい背景にはかならず自然への還元がある



第8図 古代人が生活したかも知れない崖下の洞くつ

人を並べて断崖の上に寝かせたが 継子は智恵があったとみえて夜中に寝所を替えていた 継母は夜中に来て継子を崖から突き落して我が子を抱いて帰えたと思ったら助かった方は継子であった」という話であるが この話を聞いて あらためて池をのぞくと よんだ蒼い水は妖怪の精のような静寂がうかがわれ 肌身にふるえを感じる。

下地島調査の帰路西海岸の浜で車を止められる。何事かと運転手に聞くと 自分の弟が今日は休みでこの辺の浜で魚取りをしているから食って行こうという 生きのよい魚であることには間違がないし 突魚という魚法（魏志倭人伝にある倭人が好んで沈没し魚腹をとる）であるということもあって この方法を見学するよい機会と思い 運転手のいうなりに石灰岩の崖を下り浜に出る。石灰岩の切り立った洞穴のなかには 2～3人の子供が火を囲んでいる。大人の陰は 見あたらないがおそらく海で沈没（もぐる）しながら魚を追っているのだろう。運転手が木の葉の上に 20～30cm の丸のままの焼魚を包で来てたべるといふ。もちろん調味料らしきものも塩もかかっていない箸も匙もない。子供達の様子をみると 手づかみで魚の身をさき口にくはえている。なるほど 手という親ゆずりの道具のあることをわすれていた。見よう見まねで 焼きたての魚を口にはこぶ。いその香か強いのか 魚自体にあるのか甘味を感じるほど新鮮である。「うまい」と運転手にいうと 沢山たべるといって更に色が変わった魚を出される。焼魚というのは 塩を振りかけて焼くのがごく一般的のように思っていたが 海の魚を浜で沢山たべるときには 魚自体の新鮮さの味で食うのがこつであって 沢山たべられるし味もよいと聞かされる。突漁していた大人が腰に20

～40cm の魚を4～5匹下げて帰ってくる。大変な珍味にあずかりましてと礼をいうと たべる人数がたらずにもて余っていた処だという 魚は沢山いるかとたずねるともぐりさえすればいくらでもいる。ただこの「ヤス」では 大きな魚しかとれないので「ザコ」は取らないという。

筆者もある休日に宮古の海にもぐったことがある。その時の体験では たしかに魚の数のほうが人間の数よりはるかに多いことに驚く（三浦・房総の浜では よく人間様が多いとか？）それよりも海のなかの美しさはまた格別で 桃源郷とか竜宮城というのはこのような場所をいうのではないかと自分できめつけたことがある。なにも知らないのか 魚君はもぐった人間を同僚と思うのか恐れて逃げるかと思ひしや むしろその逆で人間様に近ずいて来て 人間様の方が恐わきを感じてしまう。だが礁湖のなかのエメラルドグリーンの下海は 真上の陽光もなんとなく慈愛に満ちて 己れの所在を確認する空間のように見えて懐かしい。

南島の多くには いわゆる石器文化がないといわれているが 石英ほど硬質な石灰岩がいたる処に散在しているこれらの島で はたしてそこに住んだ古代人が石器を必要としたであろうか 海辺に行けば手頃の自然の石器がいくらでもあったであろうし 海辺に出て突魚で魚を求めても 魚を料理する「ナイフ」のかわりには貝がらで充分間にあったであろうし 皿のかわりには手頃な貝がいくらでもあるし 植物の葉で充分間にあったであろう。そうかといって 石器を持ちあたるほどの平坦な草原地帯は考えられないし 石器が必要であれば浜へ下がれば目的がはたせるのである。このような背景も充分考慮した上で 考古学的な位置づけを願いたいものである。



第9図 よんだ蒼い水は妖怪の精のような静寂がある下地島の「通り池」

運転手の機転と素朴な好意によって しばし古代人の生活の一端を見た思いがする。それだけ現代という怪物は 人間本来のすべての習性も近代化と歯車のなかに組入れて忘却のかなたに還元されてしまっていること認識する。石灰岩の洞穴で 火を囲み突魚で取って来た魚を棒にさして焼き 木の葉の皿に手の箸 おまけに貝のサカズキで泡盛ということになれば 「みやらび」が口でくたいて発酵してくれる神酒のごとく甘い感情にしたり 古代人になったような錯覚に落ち入る。

#### 渡来伝説と赤米をたべた「真白美」美人

石灰岩をくたいて敷きつめた直線の道は 島の北部にある燈台に通じている。 白い石灰岩の道端には 多く

のハイビスカスの生垣があって 白と赤の織りなすコントラストは格別な感情をそそる。池間島の舟着場から北へのびる一本の道でのことである。年の頃は 60～70歳の老婆に出会う均整のとれた老婆である。八頭身というのは 現代の若い女性の美人としての大きな要素であるが この老婆は九頭身である。身長は おそらく1.70mほどはあろうか 筆者(1.68m)より高い。よく平良市の町のなかで聞く話であるが 池間島の女性は美人だという理由がうなずける。たしかに島のなかで見うける多くの女性は 身長も大きく均整ととれていて立派である。いわゆる腹の廻りにゼイ肉のついた中年女房族というたぐいの人は余り見られない。

むかしの神様も美人の出る島を心得ていたのか この島には「マツサビ」(真白美)という美人伝説があってそれが現在の美人をつくり出す理由と関連があるという人もいる。この物語りは 現在も池間島の舟漕ぎ歌として残っている。それによると「マツサビ」(真白美)は 綺量がよく色白の美人であったが 八重山島おもと嶽の大神がこれに懸想して 彼女を拉しておもと嶽上の岩屋に連れ上り 三ヶ月の間おし込めたけれども 遂に「マツサビ」の愛を得ることができず 彼女は大神の鉄鎖を免がれて逃げ帰る途中水死した」という悲恋物語を歌ったものである。

この「マツサビ」あやぐは いかにも海国的雄大さと神秘さのみなぎった歌であり 曲自体も海の歌としての抒情を取りいれていて 神と人との恋物語としての叙事詩としては美しく いまなお池間島地方に歌われていても当然であろう。この島の漁夫の大半は 遠く南洋の海まで遠出をして魚を追いかけていてと聞くし 古くは東支那を我が海のごとくあばれ廻る海賊の行為もあったようであるという人もいることから 九頭身の均整のと

れた混血もありうる話と考えられる。

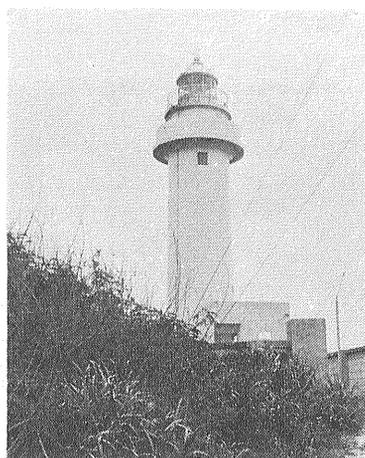
島の北端には いたる処に戦争中にうけた20mm機関砲のいたいたしい傷跡を現在にとどめている燈台がある。

以前(戦争中)は 燈台守がいたようであるが 現在は無人燈台になっている。この燈台付近は 前でものべたが宮古島で死んだ人の魂が集まる場所といわれていて なんとなく暗いイメージの感情が生まれるが それを受けつけるような暗さはなく むしろ 宮古島の北の海を望見するには最適な場所である。とくに無人燈台の上からは 宮古六島が識別出来るし 夕ばえに直南風(まはえ)に吹かれながら 八重干瀬の北の海を見ると 宝貝を求めてやって来た人たちは どの島に稲の種をまいたかと考えてみたくなる。その島は 当然宝貝の産地に近いこの池間島か 隣りの大神島が想定されてくる。

土地の古老に話を聞くと 池間島では最近まで赤米をつくっていたという。おそらくこの赤米は 熱帯圏特有のインデカ種という米であって 温帯圏にあるヤポニカ種とでは形も色も異なっていたであろう。日本に米が伝わったのは 弥生時代のことで 中国南部の福建か広東あたりから渡来してきたといわれているが その当時の米はインデカ種とヤポニカ種の間種種の米であったことが明らかにされている。しかしこの熱帯圏に近い池間や大神島では その米がとくに赤いということからおそらくインデカ種であったろうと想像する。しかしこの赤米は 足利時代の秀吉が死ぬころまで日本人が食べていたといわれていることもあるし 現在でも種子島や屋久島ではトボシ米という赤い色をした米があるということから稲の種類の断定は困難のように思える。



第10図 「真白美」美人の伝説のある池間島



第11図 戦争中にうけた機関砲の傷跡がいえない池間島燈台

池間島のとなりの大神島では 戦前まで赤米をたいていたが そこでたく赤米は普通の赤米よりさらに赤かったといわれている。 古代の神々は勿論 日本人の祖先が赤米を食べた習慣が いまでも信仰の場に残っていたり 赤飯で祝うという日本独特の食習慣は 赤が好ましい色であると同時に 古代の演出という信仰的な側面をもっているのであろう。

大神島の創世神話では その始祖である兄妹の両神は西の浜で赤米をつくっているところを海賊におそわれたという話と 季節風を利用して大陸からやってきた人びとが 南方系の赤米の種を池間島や大神島にまいたという柳田説も一応うなずけられるような気がしてならない。

池間島には 母系社会が現在までも残っているということである。 日本社会も以前は 母系社会であったのが 奈良時代に入り中国文化の影響から男性支配の制度が理想化され 結婚の主導権も男の側に移ったといわれている。 この島に残っている結婚制度は 原始社会に普通にいわれている母方居住制であって 古くは池間島に限らず我が国にごく一般に通用している制度である。 このようなことは 日頃われわれが見うける歴史上の映画や劇のなかで しばしばこのような場面を見て 不倫な思いがすることがある。 しかし 古い時代の結婚形式を理解すればあたりまえのことである。 池間島では男女の間に恋愛関係が成立すると 親しい友人などが仲介となって手みやげを持参して 女性の家族の了解を得ると 結婚式とか披露だのと面倒臭いことは一切ぬきにしてその晩から男は女の方に通い出すのである。 夕方行って朝帰り 昼間は常に実家の仕事をしていて 女性の家のことは何らかかわりをもたない。 かくして普通の場合は 子供が一人二人と出来るまでは女の家に通う。 多くの場合は 三人目の子供が出来る頃になって はじめて別に一家を営み妻君のところから独立するとのことである。 なかには 孫が出来るようになって止むを得

ず分家したという つはものもいるとの話である。 ここでいう男女のあいだの恋愛関係が成立するということは現代風な認識ではなく万葉集的な解釈が必要である。 このような風習がたまたま池間島に現代まで引き続きみられることは それだけ古い時代の伝統が残されているということであって 大和とはまったく異質な文化というものではなく むしろ共有していた原像がここでみられたということである。

一方大和における古い時代の結婚をみみると 結婚が承認されると妻の家では夫婦のために屋敷内に妻屋と呼ばれる小屋を建て婿(客人)は「妻間ひの物」という手みやげを持参して 妻屋に通いつめるのである。 婿は妻子を養う義務はなく妻子は妻方の家族で保護養育されたのである。 このようなことは 現代の認識ではどうも理解のされるものではない。 しかし 火や食料が共有されていた原始社会では性も共有され いわゆる群婚が行なわれていたであろうし そこで生まれた子供らも集団によって共有され育てられたと思われる。 よく過疎化の進んだ孤立した僻地の部落には 群婚式的なまつりの風習があると聞かされる。 その代表的なものは 岐阜県郡上郡東村で戦前まで社前でなされた氏神の秋祭りの三日間であって 村長 村会議員以下村の男女が乱舞して 共鳴する相手がいれば神前共婚が展開され この奇習によって生まれた悲喜劇はすべて神の捌きで解決される祭りがあるし古くは筑波山での歌嬬会が有名である。 筆者も2・3の地方でこのような祭りがあることを聞いたことがあるが そこでのいわゆる群婚は 孤立した部落の血族結婚への弊害への対策として異質の



第12図 水納島の耕地のなかに打上げられた石灰糞の団塊



第13図 下地町の前山にある津波碑

血を求めたのであると古老は説明してくれた。話が横へそれてしまったので話を前へにもどしたい。宮古の島々には多くの渡来人伝説が各地に残っている。その主なものには北方よりのものと中国(南支)からのものと南方系の3つがあるようである。北方からのものとして代表されるものには平家落武者の伝説や鍛冶工の伝説があり支那福州からの伝説は大浦村立の伝説としてよく知られている。この2つの伝説の地理的分布はいずれも宮古島の北西の海岸にあって南海岸とは結びつかない。むしろ南海岸の渡来人伝説は神話的な要因が深く多くの場合で津波と結びつきがあるようである。しかし実際にも多くの出土品のなかには南蛮甕破片が多くみうけられていることから南方系の東南アジア系民族の渡来が予想される。

このようなことが池間島や狩俣の女性を九頭身という長身の種族をつくり上げたのかあるいはもっと別な要因が内在したのか想像をたくましくすることも必要のようである。とくにそこに住む多くの人々の目鼻はいわゆる宮古人という顔型と異なるようにも思えてならない。それに対して南の海岸部に発達する村落の住人は比較的丈が低くその顔型もなんとなく南方系の感じをうける。このことは地理的だけの理由によるのかあるいは本質的な進入の形式が異なっていたのか多くの疑問が残る。しかし前でのべたような渡来人の伝説からわりきれば当然かも知れないしとくに福州人の渡来の年代が13~14世紀とされていることもあって一概に伝説といいきってしまってもよいのか考えさせられる点がある。平家の残党が漂着したという伝説は沖縄本島北部にもあるがこの宮古島北部の海岸に位置する狩俣付近にもこれと同じようないい伝えがある。そこは西平安名岬の根付に近い浜辺で仲間御嶽と呼ばれている。祭神は倭神と称して赤血や赤台の真主という神名で知られている。祭具類は平家の色を現わす赤色の器具を用い御嶽の石も赤色で巻いて奉持する。また部落の男子童名は正盛金盛房盛という平家の武将にまねた名前がごく一般につかわれていることも平家の系列を引くという裏書きをしているように思われる。このようなことは宮古島の中心部の平良市の地名についても平家のかかわりがあるという地名という古老もいるし老人の多くは「タイラ」とも呼んでいる。

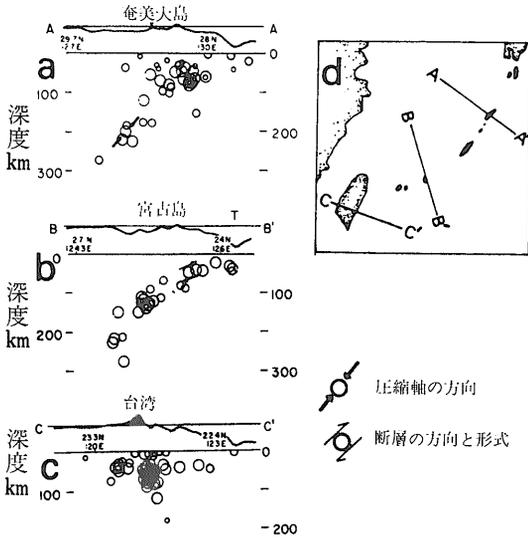
いずれにせよ宮古島の池間島大神島島尻および狩俣の北部圏は城辺や上野下地町の南部圏とは多くの対立点がある。このことは渡来人の経路のちがいを意味するのか渡来時の年代による差がそこにあるのか多くの問題がその歴史のなかにかくされている

ように思える。この変位をあえて地学という観点からむすびつけると北部の地塊と南部の地塊とではいくつかの点で対立する。その一つは北部地塊の石灰岩が南部に対して新しいということ。その二つは北部地塊には南部と異なり傾動運動がみられないということである。このような単純な背景で詮索すれば北部へ渡来して来た人種は南部圏の人種より多少时期的に遅いのではないかと考えられる。したがって宮古人の古い人種とされる人々の多くは南海岸近くに住む比較的身長が低い人々ではなかったかと考えている。しかし池間島の九頭身美人は前でものべたようにもともと海との生活が密着している人々であったであろうことから人種的な混血が大いにあたように思えてならない。

#### 史上第四位の明和の大津波

北部太平洋におこる地震によって東北日本の太平洋側では何回となく大きな津波に襲われ尊い多くの生命がうばわれている。史上最高(波高520m)の津波はアラスカのリニヤ湾に記録されている。リニヤ湾は奥行11km最大幅3.2kmの湾で史上第三位までの大津波をこの100年ばかりの間に経験している。史上第四位の津波は南西諸島の宮古群島ならびに八重山群島を襲った明和の大津波である。波高の上限は85m内外といわれている。リニヤ湾の津波は湾奥から湾口へと押しよせてきたものであって明和の大津波とは質的ながいがある。東北地方太平洋側の津波はリニヤ湾の津波とは逆で外海から浜へ侵入している津波であって明和の津波も外海から浜へ侵入してきたものである。このように外海に起きた地震津波が平面的で湾でもない海浜に波高85mという津波はおそらく世界にも余り例がないのではないかとこのような観点ではおそらく史上最高ではないかと思われる。通常の常識としての津波は海底下の浅(100km以内)いところで地震が起きた場合それにもない海底の一部が隆起したり沈下したりすることによって誘起される。このようなことから波源域がかなり広く波長は水深よりも桁違いに大きい長波であってこれが四方へひろがり海岸線に溢流する現象である。ようするに津波の原因は海底の地形変動であって地震によって引き金となる崩壊や地すべりが原因となる。

ここでのべる明和の大津波は今まで日本で起きた津波のうち最も大きいものである。この津波は宮古八重山地震(1771年4月24日)のとき起ったもので波高は実に85mの高さに達し山岳地帯を残して島全体が

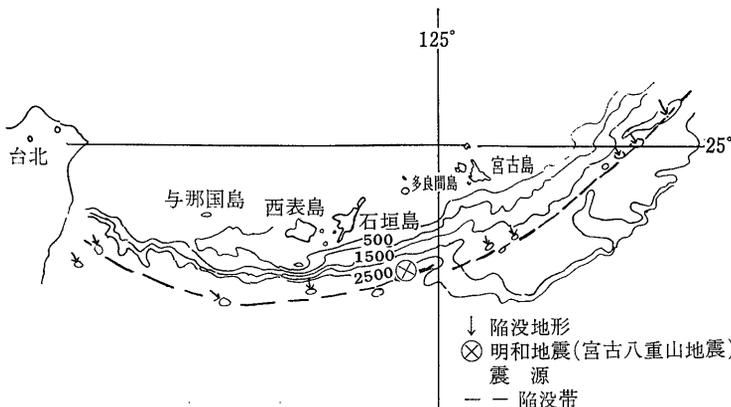


第14図 Vertical section through Ryukyu-Taiwan region  
(勝又護「琉球—台湾地域のサイスマシステイとテクトニクス」1971 連合学術大会)

海中に没し 家屋の流出 3,237 戸 溺死者 11,861 人といわれている。 これまでに日本で起きた主な津波の波高の大きなものは 宮古八重山地震 (1771年 4月24日) 約 85m 慶長 9 年 (1605) の室戸岬沖の地震では阿波で約 30m 嘉永 7 年 (1854) の紀伊半島沖地震では高知付近で 28m 明治 29 年 (1896) の三陸沖の地震では三陸沿岸の陵里で 30m 大正 12 年 (1923) の関東地震では熱海で 12m 三崎で 6m 洲の崎で 8.1m と記録されている。 わが国で津波を伴った地震は むかしから 1970 年までに約 170 回くらいあって このうち津波による死者 行方不明者の数からみて 最大のものが 明治 29 年 (1896) の三陸津波 (波高 30m) の 27,122 人と記されている。

津波は 普通深さ 100km 以上の地震には伴うことはまれであるが 震源の浅い M7.5 以上の地震には 必ず

津波が伴うという。 そして多くの地震は 上下方向に切られる断層ということであるが なかでも逆断層型の地震に伴うことが多いといわれている。 津波の大きさは 地震の規模や震源の深さ 地震の起こるからくりなどに関係するが 一般的に津波の規模階級は 六段階にわけられている。 すなわち -1 0 1 2 3 4 と呼んでいる。 -1 は高さが 50cm くらいで被害のない津波 0 は高さが 1m くらいで極めてわずかの被害があるもの 1 は高さ 2m くらいで海岸に沿って家屋の砂壊 船の流失などの被害のあるもの 2 は 4~6m くらいの高さで内陸まで若干の被害を及ぼし 家屋を破壊し人命を奪うもの 3 は高さが 10~20m にもなり約 400 km くらいに及ぶ海岸地域が被害を受けるもの 4 は 30m くらいの高さに及ぶ最大のもので 沿岸の被害地域は 500km にわたる津波ということになっている。 このような比較からみると 明和の大津波は高さで 7~8 ということになるであろうが 沿岸の被害地域はせいぜい 150km 内外であることからみると 特異な地域での津波ということになる。 このことは おそらくサンゴ礁を形成している海であるということが理由であろう。 津波の速度は 海が深くなればなるほど速くなるので 深い海では津波はあまり目立たないが水深の浅い海岸へくると急に大きくなって海岸に襲いかかり大きな被害を生じるといいう学説が このことを証明しているように思う。 この津波でもっとも被害をうけたのは 宮古島よりむしろ八重山群島であったので現地では 「八重山の津波」と呼んでいる。 八重山群島のその当時の記録によると その当時の人口 28,896 人に対して 9,313 人という記録的な犠牲者を出している。 ようするに 全人口のおよそ 3 分 1 が一瞬にして生命をうばわれたことになる。 被害地域は 津波が襲って来た南海岸が特に大きくほとんどの耕地が波の洗礼をうけ僅かに山地だけが残こされたといわれている。



第15図 琉球弧前縁堆積区のほぼ中間にある陥没帯と明和地震の震源

宮古群島では 2,548 人の犠牲者が記録されているが その大部分は 南東海岸および来間 池間 伊良部 下地 多良間ならびに水納島らの各離島に多くの被害が記録されているが なかでも特に標高の低い下地島ならびに水納島での被害が大きかったようである。 それについて 宮古本島南岸の村落に大きな被害が記録されている。 とくに 海岸前面にリーフの発達している友利 砂川 新里 宮国らの四部落はとくに著し

い被害のあったことが記されている。その記録をみると前述した四部落は避難生残者が少なくして一村（現在は部落であるが当時は村と呼んでいた）を造くことが出来なくなり 佐和田 長浜 国仲 仲地 前里の五村から村民を分け移し新しい村を造ったと記されている。この四部落の死者の多くは 下地町の前山付近に漂着したらしく そこには現在も明和の津波碑が立っていてその碑には「乾隆36年3月10日大波宮国 新里 砂川 友利」と彫刻されている。この津波の被害の状況は宮古史伝に詳しく記述されている。それを引用すると「明和8年3月10日8時頃地震があつて不時退潮し岩礁砂浜が遠くまで露われた。海岸諸村の人々はこれを怪んでいる内忽ち南方から前後3回に及び波高 12~13丈(39~40m)又は3丈5尺~2丈5尺(10~8m)に達する大海嘯が襲つて来て 宮古東岸及び来間 池間 伊良部 下地 多良間 水納の各離島を洗い 友利 砂川新里 宮国(宮古島) 池間(池間島) 前里 伊良部仲地 佐和田(伊良部島) 塩川 仲筋(多良間島) 水納(水納島)の12箇村に害を及ぼした。下地島は無人島故人畜の害がなく来間島は高所に邑ある故にこれも人畜に害はなかったが他の遭難溺死は実に2,548人(男1,149人 女1,399人)の多数に上り 馬403頭 牛2,038頭 また洗い去られた公設建物は 村番所6軒 織布屋16軒 藍蔵5軒 船具屋1軒崩壊流出し 猶大小船舶76隻 橋梁三座破損した。被害地域田畑 102町9反5畝27歩 防潮阿檀林地 299,400坪 薄原60,200坪 茅原 120,100坪 藪地21,000坪に及んだ。而して 大小の岩塊砂礫は一帯の地に打ち揚げられて荒原と化し 石垣溝渠樹木 家屋の倒潰せるあり 流失せるあり 人畜等倒壊物に圧せられたる者等ありてまことに阿鼻呼喚の巷と化して惨を極めた」。

震源に近い多良間 水納島では ことごとく農地を洗い去られ 飲食の料にもことかき生死の境界をさまよつたとのことである。たしかに標高わずか37m内外の多良間島では 全島完全に波に洗われたと思われているがなかにはかまどの火さえも消えず 全然水の洗礼を受けなかった幸運の家もあったようである。

水納島は 標高わずか10m内外のこともあつて おそらく全島津波の洗礼をうけたもののように考えられるが記録には「房室が悉く流出したので貢布を免ぜられた」とされていて その内容についてはつまびらかではないが 耕地のいたる処に津波によって押し上げられた津波石があることから 被害は以外と大きかったように思う。

震源にもっとも近い八重山群島の被害は 八重山の天津波と呼ぶだけあつて その被害は宮古の数倍に達して

いる。

この明和の地震は 東経124.3度 北緯24.0度で 石垣島白保崎から162度 すなわち南南東にあり距離は60km 内外と測定されている。地震の規模は M7.4で地震のランクからみるとB級の上ということになる。津波の波高でみれば日本最大であるが 死亡者行方不明者の数から言えば 三陸津波に次いで第二位にランクされる。一般に地震には 一定の周期があるという考えが以前からかなり信憑性の高い理論としてあつた。しかしその当時は 純統計的な研究結果からであつたが最近では地殻変動から見た地震の周期という考えかたが数学的の形としてまとめられている。そしてこれによって求められる周期は たまたま古文書の記録その他から求められる統計的数値とほぼ一致している。このような計算式で 西南日本における大地震の周期を求めると約1,000年ということになり 日本の太平洋岸でおこる地震の周期(約100年)の約10倍といわれている。

この理由は 地質現象のスピードの違いが大きな理由とされている。日本の太平洋岸でおこる地震は マントル対流に関係しており そのマントル対流の速度が1ケ年に数cm に対して 西南日本でおこる地震は 日本海の拡大速度 1ケ年数mmという比較が 10対1という数値によって表現されているようである。琉球海溝および南西諸島海溝は 比較的新しい海溝(地質年代として)ということもあつて 太平洋地域の島弧—海溝系のうちでは比較的活動度の低い方に属するが 活動的な島弧であることには間違がない。第14図は ほぼ宮古島を南北に切る断面であるが これによると地震面(震源の集中している場所)が35~40度の傾斜角で北西に深まっている。これが いわゆるフィリピン海プレート大陸プレートの接点といわれ フィリピン海プレートのもぐりこみを推定している論拠の一つであろう。しかしリソスフェア—自体がアッセノスフェアと離れて流れているという断定はないようである。そうかといって琉球弧の周辺には 地殻変動が全くないかということではない むしろ顕著な活動があつて漂移する琉球弧という発想もある。すでに「その1」で述べた「イキマ島の沈没」もその一つの動きであろうし 石灰岩の形成時の傾動運動もこのことを物語っているし 石灰岩堆積後にみられる数多くの断層も このことを実証している。さらに最近では 沖繩舟状海盆が明らかに活発な構造運動をしているということが 海域調査の結果判明している。このようなことから考え合せると 西南日本の1,000年周期よりランクが上になるのではないかと考えられる。

この周期を南西諸島の古文書によって 推考する必要はあるが 行政上の問題や 気象台設置の経過のなかで古い時代の地震記録がほとんどないことから統計的な周期を考えることは困難であるが 現在までに明らかになっている地震記録によってあいまいな周期を求めてみる。南西諸島琉球弧周辺で もっとも古い地震は 寛文4年(1664)の地震であるが その規模らについては不明な点が多い 「家屋転覆して死傷が多く出た」と記されていることからみると以外と大きな地震であったように想像される。 この地震から以後現在までのM7.0以上の地震を拾ってみると 1771年の宮古八重山地震(明和の大津波 M7.4) 1901~1909にまたがる 奄美・喜界島近海の地震M7.9~8.2)らがあるが 震度M4.0内外になると ほぼ10年に1回位の割合で起こっているようである。 筆者も1974年の春宮古島滞在中に M4.0内外の地震の音響に暁の夢を破られた思い出がある。 前で述べたM7.0以上の地震をもつて あえて周期ということにすれば110~130年ということになる。 しかし 宮古島と喜界島や奄美島では余りにも離れていて 同一時元のなかで同等に扱えないであろうし 過去の記録が余りにも少なく かつ不正解さもあって 統計的周期とはいえるものではない。 ただ 寛文4年(1664)以前にもこの地方には 津波地震が何回かあったように想像される。 このことは この地方にある多くの津波に関する奇習が多くみられることや 現在の部落の集落の中心部が 風あたりの強い高台にあるということらを考慮すれば かなり古い時代から何回となく津波に襲われて

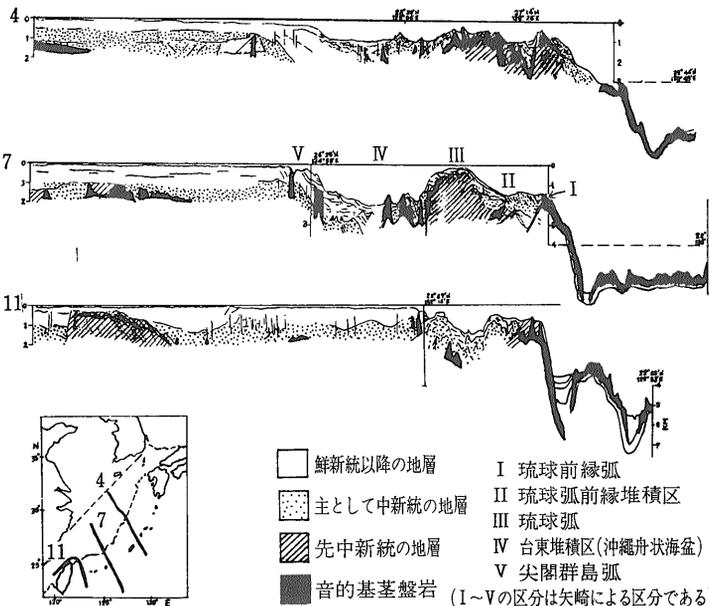
いたことが推察される。 このことは 地震や津波が起る場所はほぼ定まっているという学問的論拠とも一致する。

この明和津波の震源付近は 第15図でも明らかのように南西諸島海溝と琉球弧とのほぼ中間にある陥没地形の延長部に相当している。 この陥没地形は いわゆる琉球弧方向にほぼ300kmにわたってのびていて この地震の震源付近で多少方向を変へて いわゆる西表一与那国島方向への変異点付近にあたる。 1967年石垣島近海の海底調査を実施した「よみうり号」の調査結果によると その付近は「切り立ったような壁が出来ている」ということもあって おそらくこのような切り立った崖を形成した一つの背景には何らかこの地震が関係していたように思える。

牧野清著の「八重山の明和大津波」という単行本のなかには この津波によって打上げられた大石が 宮古島の下地町の洲鎌 棚根 スガネ 嘉手苺 入江などの各部落および上野村新里付近に多く見うけると記されている。

この津波石の最大のもの は 直径10m 高さ5m まわりは36mで 700トンもあるといわれている。 一方 今日まで日本における津波には このような大石が打上げたという現象はなかったこともあって これが確実に津波によって打上げられたという確証もないことから 疑問をもつ研究者もいる。 しかし筆者が調査した水納島の平坦面には 多くの石灰藻(径2~3m)の団塊が散在しているが これは石灰岩に比較して比重が軽いということから津波によって打上げられたものと考えられる。

宮古島の南東海岸(リーフの余り発達していない)の山地には この津波によって出来たといわれる 横に一線を引いたような白いしるしが見える。 この線は 明和津波のときの波がすり切った跡であると地元の老人が説明してくれる。 この波線の高さは 場所によりかなり高低があるが ムイガーの断崖付近ではほぼ40~50m付近にみられる。 しかし年代の経過とあいまって鮮明さをかき 人の説明がなければなかなか識別出来ない。



第16図 東支那海の海底地質(1971 加賀美・奈須・新野)